

新規収蔵作品紹介

まつしま おしましゆうばん ず 『松島御島秋晩図』



江戸時代 文化7年（1810）立原杏所筆

絹本彩色 寸法 （縦35.7cm×横51.7cm）一幅

江戸初期以来言いならされてきた日本三景の一つ、松島は宮城県松島湾内に散在する大小260余島と湾岸一帯の名勝地です。古くは、平安時代から歌枕や名勝として都人に知られる存在でした。雄島は東西に40m、南北に200mの島で松島八景の中に、「雄島夕照」があります。夕日に映える雄島の風景が名勝の一つとされました。

本作品は、文化7年（1810）の秋、杏所25歳の作品です。陸前浜街道から仙台に入り松島の御（雄）島を、海を藍、岸辺を代赭、お堂の廻りの松樹を藍、草汁で描いたものです。画面右から奥の細道碑などの碑、見仏堂、薬師堂、松吟庵、岩窟のある崖と、今は見ることができない建築物のある景色を今に伝えていています。何とこの景色、海側から見た景色です。遊覧の船に乗ったのか、小舟を手配したのか・・・残念ながら記録が残っていません。松島図は、杏所以外にも19世紀には、海側・陸側から実に多くの作品が描かれています。

杏所は二十代でさまざまな真景図を残しました。本作品以外では、「水府城真景」「豆相名勝真図」「那珂湊図」や「袋田瀑布図」などがあります。

たちほらきようしよ
立原 杏所

天明5年（1785）12月16日～天保11年（1840）5月20日

水戸藩の彰考館総裁をつとめた儒者の立原翠軒（1744～1823）の長男として水戸下市横竹隈（現在の柳町二丁目）に生まれ住みました。享和3年（1803）19歳で家督を嗣ぎ、治紀（武公）、斉脩（哀公）、斉昭（烈公）3代の藩主に仕えました。文化9年（1812）28歳で江戸藩邸勤務となり、小石川藩邸に居住しました。江戸で谷文晁につき、同門の渡辺崋山らとも親しく交流しました。謹直な筆致で、気品のある作品を多く描きました。天保11年5月20日 江戸小石川藩邸内で亡くなりました。享年56歳でした。

